

思春期の月経異常—無月経—

甲村 弘子

Summary

原発性無月経の原因は多岐にわたり、疾患によっては将来的に妊孕性の望めないものがあり、また性・セクシュアリティに関わる重要な要素をもつものも含まれる。したがって診断が確定したら今後の治療方針や妊孕性についての説明を十分に時間をかけて行う必要がある。一方、続発性無月経の誘因としては、体重減少によるものが最も多く、神経性やせ症では専門医との連携を要する場合がある。近年アスリートの月経異常も注目を集めている。多嚢胞性卵巣症候群は頻度の高い疾患でさまざまな月経周期の異常を呈する。

Key words

初経遅延
 原発性無月経
 続発性無月経
 染色体検査
 エストロゲン・プロゲステロン療法

はじめに

思春期にみられる月経異常には、早発月経、初経遅延、無月経(原発性・続発性)、月経周期の異常(頻発月経・希発月経)、月経量の異常、月経困難症などがあるが、本稿では無月経に焦点を当て、初経遅延、原発性無月経、続発性無月経について解説する。

初経遅延

日本では「満18歳を迎えても初経の起こらないもの」を原発性無月経と定義しているが、海外ではその基準を16歳前後にしていることが多く、日本小児内分泌学会においても、初経の遅れに関して15歳頃までの介入を推奨している。そこで日本産科婦人科学会では用語改訂を行い、原発性無月経の定義はこれまで通り変更せず、「満15歳以上満18歳未満で初経の発来していないもの」を初経遅延とし、「満15歳以降に初経の発来したものを」遅発初経と新たに定義した(図1)¹⁾ [『産科婦人科用語集・用語解説集 改訂第4版』(2018)]。したがって15歳で初経がない場合には精査を行い、治療介入を始めることが推奨される²⁾。

初経遅延には今後18歳を過ぎても初経の起こらない原発性無月経も含まれるため、診断・治療については次項「原発性無月経」で述べる。

Hiroko Komura

こうむら女性クリニック院長